

(別添)

世界の人びとのためのJICA基金活用事業・業務完了報告書

1. 業務の概要:	
(1)事業名	「ブータンでの脳卒中デイサービスセンター設立のための人材育成」 (チャレンジ枠)
(2)実施団体名	チーム 夢のかけ橋
(3)実施期間	2020年10月1日～2021年6月30日
(4)実施国	ブータン
(5)活動地域	ティンプー
(6)活動概要	
①活動の背景:	<p>夢のみずうみ村では、日本在住のブータン人5名を有償ボランティアとして2019年～2020年の数か月間受け入れ、リハビリテーション分野でブータン人材育成を実施してきました。藤原茂等とブータン人5名は、チームをつくりブータンの福祉の向上のために話し合いを重ねてきました。</p> <p>ブータン側のカウンターパート、Bhutan Stroke Foundation(ブータン脳卒中協会 BSFと後記表記)は、近年増加している脳卒中後遺症患者を支援するために設立された現地NGOで、2019年に設立され、2020年10月にSCRとして認可されました。協力団体の旧名DPAB(ブータン障害者協会 DPO 2021年新名称)は、障害者当事者団体で障害者を支援する現地NGOです。ブータンでは、特に脳卒中に罹患する患者数が激増していますが、退院した患者の後遺症に対するリハビリテーションや在宅ケアは皆無です。ブータン政府においても人材や予算が不足しているため、公的支援がほとんどなく、スタッフの専門的な研修の場も乏しい。今回ブータンの両団体より、脳卒中後遺症患者への支援スタッフの人材育成についてチームへの協力要請を受け、支援をはじめました。</p>
②活動の目標:	<p>上位目標は脳卒中に関わる人材を育成し、ブータンのリハビリテーションの底上げを図る。</p> <p>この事業の目的は</p> <ol style="list-style-type: none">①調査・啓発を通じて人材育成を行う。②ブータン脳卒中協会のスタッフやボランティアが夢のみずうみ方式「健康トリム」などの技能を身につける。③脳卒中患者の利用者が年間通して活動できる、小規模プログラムを試行する。

2. 業務実施結果:

(1)実施した内容

1. 調査・啓発・組織強化

●首都ティンブー市およびモンゴル州、ゲレフ州、ブントアン州、プナハ州、シャムガン州などにおける脳卒中の患者の実態調査・ニーズ調査・可能性調査(行政との連携、病院との連携、ブータンの SCR 民間団体との連携、デイケアセンターの物件など)を行いました。当初ティンブー州で内の調査・啓発を予定していましたが、コロナ禍の影響でオンライン対応としたことにより、対象地域をむしろ広げることができました。

●脳卒中の患者当事者および家族の家庭訪問・オンライン会議を通して、対面式でアンケート調査、及び聞き取り調査(当初の対象人数目標 20 名を超える 35 名対象)を実施しました。今後、その調査結果をもとに、名簿管理・ケーススタディ記録・現状分析・統計をまとめ、今後のプログラム実施の方向性を定めて行きました。

●DPAB(ブータン障害者協会)などで障害者を対象にして実施した調査に共通項目に加え、脳卒中特有の質問票を作成し、調査を実施しました。当初の計画に加え、藤原がオンラインを通じて指導したバーセル・インデックスを用いてのアセスメントを、調査に加えました。質問票作成には、ブータンの医師や理学療法士からのアドバイスを取り入れ、聞き取り調査にも理学療法士が関わりました。

●脳卒中患者と家族が抱えている問題・課題・希望を、口頭で丁寧に聞き取り、文章で記録し、音声録音記録も残し、将来、ケーススタディでもフォローできるようにしました。この調査およびデイケアセンターの活動では、日本の夢のみずうみ村で研修を受けた2名(イシさん、ジグミーさん)が活躍しました。彼女らは2019年に、千葉県浦安の夢のみずうみ村で、有償ボランティアとして3ヶ月ほど研修を受け、夢のみずうみ村のサービス内容の概要を把握していたため、初めて脳卒中のデイサービスを開始し BSF の即戦力として活躍しました。

●夢のみずうみ村で研修を受けた研修生が中心となり、夢のみずうみ方式のテキストを英文に翻訳し、脳卒中協会と共有しました。また、藤原がラインなどで、この二人に日本語で直接データや指示を送り、彼らが BSF に翻訳・通訳を行いました。N3 レベルの日本語ができる研修生の存在は、今回のプロジェクトの要となり、夢のみずうみ方式の内容を伝える調整員の役割も果たしました。

●オンライン会議を通じて、ブータンの医師・理学療法士・看護師にアンケート調査・聞き取り調査を行い、またアドバイスを頂きました。

●SNS メッセンジャーでグループを作り、患者当事者・スタッフ・理学療法士・藤原先生が情報共有できるようにしました。このグループが自助ヘルプグループとして活発な機能を果たすようになり、活発な情報交換意見交換の場となりました(成果⑥)。

●FB を設け、公に向け、脳卒中協会の活動や脳卒中に関する啓発活動の情報発信をはじめました。

●啓発用の簡易なバナーおよびポスターを作成し、事務所に掲示し、かつ調査・訪問ケアに活用し始めました。2021年2月初旬まではロックダウンなどの影響で訪問できない状況だったため、オンラインによる聞き取り・啓発活動を実施しました。

●ブータン国営ラジオ(30分番組)で、脳卒中に関する啓発を実施しました。

●王立大学とブータン障害者関係団体と連携し、障害者の社会参加に関するシンポジウム(2021年4月)を行うなどの啓発活動を実施しました。

●CSO 主催などの会議へ参加し、プレゼンしました。

①がん協会・腎臓協会など保健に関する CSO が集まったの会議に出席し、脳卒中に対する取り組みをプレゼンしました。このプレゼンをきっかけに、他の団体のニュースレターなどにブータン脳卒中協会の試みが紹介されるようになりました。(2020年12月3日)

②CSO 四半期レビュー会議に参加しました。(2021年3月4日)

③ブータン脳卒中協会を含む5つの障害者団体(DPO)が中心となり、王立ティンブー大学のコーディネイトにより、官公庁・企業 DHI などの金融機関などに対し、「障害者の起業および障害者人権擁護」に関するプレゼンを実施しました。(4月13~15日)

④UNDP 主催の災害対策に関する会議に三度参加し、コロナ禍および災害時の障害者のリスク管理について発言しました。

●CSOA(政府機関)による モニタリングが 2021年3月に実施され、法人運営が良好であるとの評価を得ました。

●ブータン脳卒中協会の理事会(法人認可を得たことに関する理事会および総会)を2020年12月19日に実施し、戦略会議を1月28日に実施し、理事会を3月末に実施し、規約を整備するなど、組織強化を図りました。

2. ブータンと日本を繋いでの技術講習会

●首都ティンブーと、日本にいる藤原茂先生などの講師とをつなぎ、ビデオカンファランス(ZOOM 会議)を2020年10月より実施し、健康トリム(自主トレーニング機器)や脳卒中のデイケアなどの技術講習会を小規模で実施しました。また、脳卒中患者に関する個別のケース会議を行いました。開始時点では月1回程度を予定していましたが、2020年12月から2021年2月まで月2回実施しました。

●2021年2月中旬までは、三密を避けるため、対象者5名程度(スタッフ3名、脳卒中患者2名)にて実施しました。

●2021年2月後半は、三密を避けるため、スタッフ5名、脳卒中患者と家族4名対象に実施しました。

●2021年1月の ZOOM 会議では、ブータンの患者や活動の問題に対し、藤原先生が現状把握・ケア方針・個別のケア目標など、直接具体的な指示を与えました。

●2021年2月より、ZOOM 会議では藤原先生が患者を直接アセスメントし指導する活動よりも、スタッフボランティアの育成に重点を置き、スタッフが夢のみずうみ方式を身につけ、患者の対応や ZOOM 会議をコーディネートする方向で実施する段階に移行しました。ZOOM 会議は、ビデオ録画し、報告・振り返り・検証に役立てました。

●2021年3月末~5月は、藤原先生の体調不調のため、藤原先生による技術講習会を休会しました。しかし、ブータン在住の理学療法士・ソーシャルワーカー・NGO スタッフが得意分野を活かして、毎週月曜日に、家でできるリハビリ、習字によるリハビリ、ヨガの瞑想を通じてのストレスリリース、脳卒中予防や食事の改善について、オンライン講習を実施しました。

●2021年6月12日より、藤原先生のオンライン講習が再開されました。

3. 小規模プログラム試行

首都ティンプーで、ごくごく小さい小規模脳卒中デイケアプログラムおよび訪問ケアプログラムを 2020 年 11 月から試行しました。

① 脳卒中デイケアプログラム(対象 2 名～5 名)および訪問ケアプログラム(調査も兼ねる)試行

●実施方法 ロックダウン期間中は、オンライン会議でブータンの理学療法士などを中心に訪問ケアプログラムのサービスを提供

●実施者 DAWA TSHRING

夢のみずうみ村研修生 2 名(実施補助) Yeshi, Jigme

理学療法士(訪問リハビリ オンライン リハビリ) GIRI

●活動内容 オンライン リハビリテーション

自宅でできるリハビリプログラム

デイケアセンター および自宅でのきのこ栽培 作業療法

デイケアセンター および自宅での水耕栽培・園芸作業

デイケアセンター および自宅での料理 家事

② 訪問ケアプログラム

●実施内容 週 1 回以上、訪問およびオンラインケアプログラムを実施

●日程 9:30～11:30 1 名 家庭訪問 健康トリムなどを用いて、自主リハビリ・記録

13:30～15:30 1 名 家庭訪問 健康トリムなどを用いて、自主リハビリ・記録

●実施方法 オンラインケアプログラムは、1-3 名の脳卒中患者に対して、藤原先生、菅氏、DAWA TSHRING 氏、GIRI 氏など理学療法士 3 名など数名で 2 時間実施。プロジェクトの記録として ZOOM で録画。

4. デイケアセンターおよびブータン脳卒中協会事務所開設

●新しい事務所をティンプー市内に開所(2021 年 3 月 1 日、住所 Dorji's House Dorden lam Motithang Thimphu)

●事務局長のダワさんは必死に頑張り、街中のアパート 1 階に事務所を見つけ、無事 2021 年 3 月 1 日付でデイケアセンターを開所しました。デイケアセンターの開所は、当初予定していませんでしたが、本事業を現地で継続的に行っていく上で、現地のブータン脳卒中協会の信頼性を高め、事業の持続性を向上させるために、常設のセンター・事務所を開設するに至りました。

●センター開設にあたり、夢のみずうみ村で研修生だったイシさん・ジグミーさんと、他 3 名のボランティアとダワさんの奥さんやソナムさんの脳卒中患者さんたちが、一丸となって掃除し、中古の寄付された家具などを搬入しました。ダワさんが友人や知人に声をかけ、必要なテーブル・椅子・机・本棚などを、中古で譲ってもらいました。

5、危機感から生まれた果敢な創造的な前進(当初計画からの発展的な実施内容)

藤原先生が2021年3月後半より5月に体調を崩し、オンライン研修を休会せざるおえなくなりました。この出来事のため、ブータン脳卒中協会の存続やプログラムの継続ができるのかという、不安と危機感が生じました。そのため、事務局長であるダワさんは、必死になって今まで受け身の理事・役員・政府機関などに声を大きく働きかけました。その結果、理事・関係者・脳卒中患者自身が潜在能力を全開させなければならなくなりました。

① 保健省との協働 啓発活動

ティンブー市内の王立病院の医師タシ先生を中心に、保健省に働きかけ、ブータンの医師会などで啓発活動と現状調査に協力を要請し、保健省官僚との話し合いを何度か持ちました。まだコロナの対応策でほとんどの予算が使われてしまうので、脳卒中に対しての予算獲得までには至っていませんが、保健省担当者には、脳卒中患者の現状に関して理解が深まっています。

② 労働省との協働

主にブータンの障害者関連5団体が連携し(ブータン脳卒中協会も中心的役割を果たしました)、ブータン国内の金融機関・国際機関・政府機関・DHIなどの企業・ボランティア・学生などに対して、4月13～15日の3日間のシンポジウムを実施しました。この王立大学での障害者の社会参加に対して協力を仰ぐ研修が、効を奏しました。その後何度も労働省などとの協議を経て、労働省主催で、2021年5月27日より、ブータン脳卒中協会に所属する4名を含む障害者15名に対する、5ヶ月間の毎日(月～金)の集中職業訓練がNational Training Center for disability(国立障害トレーニングセンター)にて、スタートしました。ベーカリー(パン製造)のコースです。こうした職業訓練コースは、当初全く計画に入れていませんでした。しかし、夢のみずうみ村でリハビリとしてパン作りを実施していたことを、研修生であったイシさん・ジグミーさんが思い出し、BSFにパン作りをしたらどうかと提案し、これがインスピレーションとなりました。追い詰められたときにインスピレーションが生まれる、そんなヒラメキでした。そしてそのひらめきが、コロナで喘ぐ他団体と共有され、パン作りで障害分野を横断する新しい試みのビジョンが障害者団体の協議会で生まれ、労働省に働きかけたところ、とんとん拍子に実現しました。

この研修では脳卒中・身体障害・聴覚障害・視覚障害・知的障害(自閉症 ダウン症など)など、異なる障害者が一堂に介して行う、労働省主催の初めての職業訓練の試みになりました。脳卒中の患者だけでは、とかく失った能力のことを考え、鬱状態に陥りがちですが、生まれた時からの障害となんとか折り合いをつけて生きてきた、ほかの障害者に出会うことで、脳卒中の患者さんは、自己憐憫の連鎖から抜け出すことができました。また障害があっても、パンを生産し販売するという忙しい日々を過ごし、生産性のある役割を担うことができ、鬱になっている暇がなくなりました。これは身体・精神の回復に多いに役立っています。

③ 国営ラジオ局との協働

事務局長のダワさんは、国営ラジオ放送で、自らの妻が30代前半に脳卒中で倒れた経験を交えながら、脳卒中の概要や予防方法など、またブータン脳卒中協会の活動紹介を行いました。まだまだ脳卒中に関して迷信が多いブータンの中で、科学的な情報提供が始められ、同時に脳卒中になっても、リハビリをすれば回復し、生活を再建することができることを情報発信しました。

④ World Stroke Organization(世界脳卒中協会)加入

世界脳卒中協会への加入が認められ、様々な情報が入手できるようになりました。

(2)実施成果：

●上位目標に関する成果

ブータンのリハビリテーションの底上げは、端を発したに過ぎない段階で、初めの一步が進んだだけで、1合目にさえ達していないのが現状です。今後、長期的な関わりと人材育成が必要とされています。しかし、ほとんど退院後の脳卒中に対するリハビリが皆無であった状況から、ブータン人自らのイニシアティブで、人材育成とデイケアセンターが始まったということは、はじめの1歩かつ大きな一歩であり、ここから端を発して、発展する可能性を内包したものです。オンラインなどを通じて、ブータンの広範囲の患者や家族にアウトリーチしていく可能性も、垣間見ることができました。

●事業の目的に関する成果

①調査を通じて、「何が、どのくらい未整備で、整備していく必要のあることは何か」(以下の点)が、事業開始時よりも具体的にわかってきました。

- ・自宅や地域でのリハビリテーションが皆無である。
- ・自宅や山地地域に住む患者がほとんど医療・福祉サービスにアクセスできない。
- ・脳卒中患者が、心身の困難に加え、社会的・経済的不利をこうむっている。

②コロナ禍で、日本人指導者がブータンの現地を訪問できず、チーム夢のかけ橋ができた人材育成は限られたものでした。しかし、オンラインでの悪戦苦闘の中で、藤原先生の必死な姿を見て、ブータンの皆さんの心に火がつけました。また、藤原が体調を崩されて研修が中断した際に、ブータンの関係者・関係団体の皆さんが「依存的」であることに自ら気づいたことなど、ブータンのリハビリテーションの底上げにかかわる皆さん自身のポジティブな変化や気づきが生まれました。

③一つひとつ必要な研修や小規模プログラムの試行が、着実にできました。

④街中に新しいデイケアセンターを開設し、プログラムを提供できるようになりました。

⑤プログラムを通して、ダワさんの奥さん(脳卒中の当事者)を含む5名の当事者が、素晴らしく元気になっていきました。またその元気になる様子を、当事者や家族が積極的に情報発信しました。

⑥当事者の皆さんやその家族がメッセージグループをつくってやり取りをするなどのセルフヘルプの仲間づくりやコミュニティづくりが生まれました。

⑦BSF 事務局長のダワさんが活躍し、成長した結果、外部の国や CSO などの重要な委員に選ばれるなど、人材育成の成果が出ました。

(3) 得られた教訓など:

① 赤裸々であることが、道を開く。

私たちは、困難な道を歩んでいたため、ブータン側も日本側も、ストレスやフラストレーションが高かったのですが、もともとの性格もあって、裏表なくそれを互いに表現しました。

夢のみずうみ村がコロナの影響で経営危機に直面している折、日本からの経済的支援は JICA 基金の資金からしか期待できないこと、藤原先生の体調が思わしくないことなども赤裸々に伝えました。

オンライン講習中にも、藤原先生は地団駄を踏みながら、真剣に取り組みました。地団駄を踏む赤裸々な姿が、患者や BSF の自発性を促しました。

② 危機はインスピレーションが生まれるチャンス

この事業には主に4つの危機がありました。

(i) コロナの影響で当初計画した事業内容が全く実現できないという危機でした。しかしオンラインで、できることを実現したところ、当初の首都だけの講習やプログラムの予定では決してアウトリーチすることができない、ブータンの深い山間地の辺境にすみ、自宅から出ることができない患者と家族にアウトリーチすることができました。

(ii) 藤原先生の体調不調によるプログラム継続の危機

この危機は藤原先生に依存していた BSF や事務局長の自立や、存続のために自分は何をしたらよいかというインスピレーションを引き出しました。火事場のばか力のようなインスピレーションと行動力を引き出したのです。また夢のみずうみ村で研修した研修生の二人の活躍や、患者当事者の自立を引き出しました。

(iii) 経済的危機

夢のみずうみ村の経営危機・ブータン脳卒中協会の経営危機により、危機感から背水の陣で取り組みました。それがかえって成果を生みました。

(iv) 事務局長ダワさんの人生の危機

比較的順調だった人生の中で、自分の妻が脳卒中で倒れるという人生の危機を通じて、ダワさんは解決策を自ら生み出さなければ、家族が不幸になってしまうという状況に追い込まれ、背水の陣で取り組みました。この切羽詰まった状況がなく、順調な人生だったら、ダワさんはここまで必死になれなかったかもしれません。何度か BSF の設立も、事業も投げ出したいと思うくらい辛い危機を乗り越え、リーダーとして成長していきました。この危機が、ある意味ではリーダー育成の起爆剤となったのかもしれない。

③ 現地のイニシアテブをつぶし、足を引っ張らないために、喜びは共有するが、あえて口出ししない

新しいイニシアテブが生まれる時は、全体像は見え、断片的なひらめきであることが多い。そうした断片を、嗚呼でもないこうでもないと言語化してそのカオスを仲間と共有することが重要で、初めから理論やゴールの説明を理路整然と説明しようとする、その理論や型・計画にはめようとして、せっかく現場で生まれたひらめきや発想がつぶされてしまうことがあります。そのため、オンライン講習以外の時は、ブータン側の話を遮らず、聞くことに徹しました。そうすると自ずと、まるで雪の結晶が綺麗な結晶を形作るように、ブータン側の考えがまとまり、爆発的な行動力へとつながりました。

こうした危機に直面しながら、前進できるのは、NGO だからこそその醍醐味ともいえます。

(4) 今後の活動・フォローアップの方針:

真にブータンのリハビリテーションの底上げを図るためには、今後長期的な関わりと、行政機関との協働が必要になってきます。そのために以下の活動を予定しています。

JICA 基金 一般枠に 2021 年申請予定

2022 年 JICA 草の根技術協力事業し申請予定、長期的なフォローアップを計画中
その際の人員配置は以下の通り

【日本側】プロジェクトマネージャー1名、現地調整員1名

国内調整員ブータン人2名、研修指導担当者2名

【相手国側】責任者1名、運営・管理・コーディネーター4名

また JICA のスキームだけに依存するのではなく、本プロジェクトの特徴を生かすことのできる、事業継続の道筋を、日本側でもブータン側でも探っていこうと考えています。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

①BSF 事務局長ダワ ツエリングさん エピソード 本人レポート(英文) 翻訳・要約

妻の脳卒中で倒れる。

私の名前はダワ ツエリング(39 歳)、私の妻リンチエン ペルモ(34 歳)は二人の子どもにも恵まれ、幸せに暮らしていました。



(脳卒中で倒れる前のダワとリンチエンの写真)

しかし、2019 年、34 歳の妻が突然目の前で意識を失い、地面に倒れました。私は彼女を抱きかかえて、病院に駆けつけました。妻は ICU で生命維持装置につながれ、医師は最悪の場合の覚悟をするように私に告げました。妻は1週間以上意識が戻りませんでした。私は友人に脳卒中に関する情報を集めて欲しいと頼んだところ、ブータン医師タシ テンジンの論文などを探してくれました。私はタシ医師に連絡をとりました。タシ医師は「『脳卒中とは何なのか、どうしたら治るのか教えてください。』と聞いてきた人は君が初めてだ。事務所に来て話をしましょう。」と言ってくださり、私は初めて脳卒中について知ったのです。

妻の回復

妻が倒れて 3 週間したとき、私が『水が欲しいか、果物が欲しいか』と尋ねると、妻は目の瞬きで自分の意思を伝えることができるようになりました。妻は意識を取り戻しましたが、脳卒中による失語症で、全く話すことができなくなっており、半身不随でほとんど何もできなくなっていたのです。入院 23 日後に妻は退院し、自宅に戻りました。この時から、最も困難な状況に私たち家族は直面しました。脳卒中という問題が、患者やその家族全体を揺るがす大きな問題になり、社会的にも経済的にも重圧がのしかかってくることを体験しました。

私は休職し、妻を背に負ぶって、病院や寺などのあらゆるところに行き、脳卒中の回復を試みました。1 年ほどすると妻はなんとか寝たきりから自分で歩くことができるようになりました。

BSF の設立

その頃、それまで常に私と妻を支えてくれたタシ医師が、脳卒中に関する啓発や、私たち家族がたどった経験を共有し、脳卒中患者を支援するフォーラムをつくって欲しくないかとアドバイスしてくれました。タシ医師は、それを自分自身でしたいのだが、医師の仕事は多忙を極め、また病院という枠組み内で、退院した脳卒中患者にアウトリーチすることが、医師という立場や現存の医療の仕組みではできないから、ぜひ私にイニシアティブを取ってほしいと勧めたのです。このようにして BSF の任意団体が 2019 年に設立されました。

藤原先生との出会い

私の妻が再び自分の足で歩くことができるようになったのには、藤原先生の支援があったからでした。

私たちの窮状と BSF を設立しようとしていることを、聞きつけた藤原先生はブータンにはるばる駆けつけてくれ、私の妻にリハビリを施術し、また何をしたらいいかを 5 日間に渡って指導してくださいました。私は涙がこぼれて仕方ありませんでした。その日から妻の状況は大きく改善したからです。

藤原先生がブータンへ駆けつけてくださった時に、BSF と藤原先生は脳卒中のリハビリに関する覚書を交わしました。その時、私はどのように組織を立ち上げ、脳卒中のリハビリのために何をどうしたらいいか、まだ分からなかったのですが、藤原先生に背中を押してもらい自信を持って前進する決意をしました。



(写真 藤原がブータンに駆けつけ、指導に当たった)

夢のみずうみ村のブータン人研修生の活躍

日本で夢のみずうみ村で研修を受けたブータン人青年たちが、デイケアセンターの企画・運営に関わってくれ、ブータンデイケアセンターの基盤を作ることができました。

最大のチャレンジは、脳卒中のデイケアを立ち上げるための資金という難題でした。JICA 基金の支援により、私たちは前進することができ、現在 35 名の脳卒中患者と家族が回復しています。またデイケアセンターを開設することもできました。新しく立ち上がった BSF にとっては JICA 基金の技術的・経済的支援なしには、実現不可能でした。BSF に対して、脳卒中の患者のインクルージョンと福祉社会をつくるための、技術的・経済的支援の、継続を心よりお願い申し上げます。ありがとうございます。

②ZOOM 会議で藤原先生が地団駄踏みながら指導することから生まれたとてもつもない成果

藤原先生の ZOOM 会議は、悪戦苦闘の中、前進しました。伝えたいことが、どうしても ZOOM 会議ではすんなりとは伝わらない。1週間準備して作ったビデオ画面などを使っても、細かいところは伝わらない。実際に会って実技をすれば簡単にすぐできることが、ZOOM ではできない。精度や完成度の高いリハビリを実現してきた藤原先生にとって、ほとんど 0 に近いブータンの脳卒中のリハビリの現状に応用し、しかも ZOOM 会議で伝えるのは至難の技です。言葉のバリア・文化のバリア・国民性の違いのパンチを、私たちは凝縮した形で、ZOOM 会議という限られた時間と画面で、強烈に経験しました。それは精神的ボクシングマッチのように、藤原先生は、会議中に『そうじゃない、そうじゃない』と地団駄を踏むこともしばしばでした。ZOOM 会議が終わると、みんなぐったりしてしまうほどで、藤原先生も「投げ出したいけれど投げ出さない」とぼやくこともあり。一見すると失敗とも見えるドタバタの試行錯誤続きでした。にも関わらず、あるいはだからこそ、ブータンの脳卒中患者さんが、受身の姿勢というバリアを自ら打ち破り、自ら自分の自宅でのリハビリの様子を、メッセージグループに投稿し、新事務所とデイケアセンターの開所のための掃除など、半身不随の体で自発的に活躍しました。

藤原先生とチーム夢のかけ橋は、身体的にも精神的にも経済的にもギリギリのところ、人生最後の力投のように、地団駄踏みながら進んできました。ある意味ではこのカッコ悪いとも言えるありのままの地団駄を踏む姿こそが、希望を失い、無為に過ごしていた脳卒中患者当事者と BSF をもっとも動機づけ励ましたと思えるのです。藤原先生の人生をかけた存在の熱量と真剣さが、思いがけない形で伝わり、藤原先生が最も大切にしてきた患者当事者の自発性の火がついたと思えるのです。

地団駄を通じて、技術やノウハウや理論だけではなく、生き様が、しかも ZOOM 会議を通じて、わずか半年で伝わるという思いがけない成果というのは、私たちにとって大きな驚きです。『愛や思いは時空を超えるのかもしれない。』

さらに藤原先生の体調不良によるオンラインの休会などの事態は、脳卒中患者にとっては、ショックな出来事でした。しかし藤原先生が指導者として役割だけではなく、障がい者当事者のロールモデルとしての役割も、期せずして果たし、結果として患者たちはさらに動機づけられたのでした。

藤原先生はよく『一人では何もできない。しかし一人が始めなければ何も始まらない。』と口癖のように言います。ブータンの現場でも、全くその通りでした。

③研修生 シグミ チョデンさんの感想

BSF での経験

BSF でボランティアとして働く経験は、自分の人生の中でも素晴らしい経験です。愛情に満たされ痛み苦しみから解放されて幸せに行きたいと誰もが望んでいます。脳卒中患者を支援する素晴らしい機会を得ることができ、幸せですし、また最もやりがいのある仕事です。お金にはなりませんが、達成感があります。また BSF をお手伝いする間、いくつかの NGO と協働し、脳卒中について学ぶことができ、今では脳卒中について、啓発活動に関わる自信ができました。脳卒中予防に関わり、オンラインでリハビリテーションや瞑想の活動のコーディネートすることの自信もつきました。

脳卒中患者が自分の最大限の可能性に到達するための旅路を支援する役割を、自分に与えてくれた

ことをとても嬉しく思っています。またこのプロジェクトを通じて、多くの新しい人々との出会いがありました。私は藤原先生が日本でもブータンでもやりがいのある仕事を紹介してくださったことに心から感謝しています。先生の熱意と実践例・献身的な関わりが、私たちの道を照らしてくださいました。また JICA 基金にもなんと感謝の言葉を表して良いかわかりません。BSF がブータンにもたらした親切なオープンハートを、私たちは今後も共有して行きたいと思います。

(2) 活動の写真



ベーカリー職業訓練オープニング

脳卒中協会より4名 全研修生15名が参加し5ヶ月間の訓練(毎日)を受けています。

(3) JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

① JICA 事業のスキームの一つで実施していることが、BSF がブータン国内の保健省・労働省に提案をしたり、情報・意見交換したりする際に、大きな後押しになりました。信頼に値する組織・団体が認知度を高めてくれました。またこの事業が、ブータンのリハビリテーションの底上げを上位目標とかかげるなか、脳卒中患者の支援や人材育成が国策として実施されるようになる基礎を作るためには、日本の一民間任意団体であるチーム夢のかけ橋や、夢のみずうみ村の力だけでは到底不可能です。ブータンのリハビリテーションの底上げに至る発展性につながるためには、国策として展開される必要があります。JICA の後押しで実施するスキームは、国策として今後前進するためにも、対外的にも、BSF に取っても極めて重要です。今後ともご指導どうぞよろしくお願いいたします。

② 伴走支援者によるアドバイスと後押しと JICA のコンサルテーションがとてもありがたかったです。無我夢中で藤原先生とブータン現場のダワさん達ともども、悪戦苦闘中の最中に、コンサルテーションがあって、本当によかったです。無我夢中だと自分たちで何をしているのか、よくわからなくなってしまうので、客観的に振り返り、どんなに素敵なおことが生まれつつあるのかを、再確認することができました。ほとんどボクシングで、ゴングがなってコーナーで、ゼイゼイ言いながら、コーチから言葉かけてもらっている感じでした。

あしたのジョーみたいに、「燃えたよ……まっ白に……燃えつきた……まっ白な灰に……」みたいに、最後まで熱く駆け抜けそうな藤原先生の、ポロポロかつ雄々しい姿に、私たちもブータンのみんなも夢のみずうみ村もハラハドキドキしながらの匍匐前進です。

どう転んでも波乱万丈な珍道中を進んできましたが、伴走支援者コンサルテーションの支えがあり、完走することができました。ありがとうございました。

③ 「世界の人びとのための JICA 基金活用事業(チャレンジ枠)」が、事業の目的さえ軸ブレしなければ、現状に合わせて、柔軟に軌道修正できる枠組みであったことも、ありがたかったです。コロナで計画通りに進まない中、思いがけない突破口を突破して行くことができる枠組みであったことで、現地のイニシアティブを最大限に後押しができました。